

エピソード3

～ ドングリ～

40代 中学校教諭 男性

先日、校庭の片隅でドングリを見つけました。若い頃、先輩の先生に教わった言葉を思い出しました。

「ドングリだって、うまく育てば椎(しい)の大木になる。」小さな椎の実も、湿り気や日当たりぐあいがちょうど良ければ、大きな森をつくる立派な木に育つという意味なのだと思います。生徒たちとドングリは同じではありませんが、秘めている可能性は同じです。そして、みんなうまく育てて欲しいと願うのも大人の共通の思いです。ドングリを見ながらそんなことを思いました。

このエピソードを読まれて、こんな疑問を持たれる方もいらっしゃるかもしれません。「ドングリに善し悪しがあって、良く育つ素質を持ったどんぐりだけが良く育つのだ」と。

しかし、この考えは誤りだと思います。ドングリも他の生き物も、進化の長い時間の中で、良く育つ素質を持ってなかった個体は自然淘汰され、子孫を残せなかったはずで、つまり、現在生き残っている個体は、良く育つ性質を持ったものばかりだと言えるのです。人間も同じです。

ですから私たち人間は、おたがいが心地よく暮らすための向上心や思いやりの心を、生まれつき持っていると考えるのが自然です。そして、こういう人間のとらえ方を、私たちは「ピグマリオン人間観」と呼んでいます。

では、子どもたちが育っていく課程で、ドングリの成長に必要な、湿り気とか日当たりに相当するものは何でしょうか。それは周りからの温かい眼差しと励ましの言葉なのだと思います。

「一人でできるかい、困ったときは手伝うよ。」

「ずいぶんうまくできたじゃないか。すごいなあ」

こんな言葉かけを不快に思う人はいません。

「そんなことも一人でできないのか」

「これじゃあダメだ」

と言われてやる気が出る人もいないはずで。

人は叱られてばかりだと心も体も縮こまり、内に秘めた意欲は凍り付いてしまいます。人間に限らず生き物たちはみんな、暖かな春の到来を待っているのです。

ピグマリオン人間観……人は生まれながらにして、進歩し向上を目指す生き物だとする人間の見方